

令和7年度
愛媛県議会海外派遣（カリフォルニア州）
結 果 報 告 書

令和7年11月8日（土）～13日（木）
アメリカ合衆国 カリフォルニア州

目 次

1. はじめに	1
2. 派遣目的	2
3. 派遣期間	2
4. 議員団の構成	3
5. 派遣結果報告	4
6. おわりに	18

1. はじめに

先般の9月定例会で議決を頂き、去る11月8日から11月13日の6日間、南加愛媛県人会創立115周年記念事業として米国ロサンゼルスへの海外派遣が実施された。

県議会から超党派5名の訪問団が編成され、公式訪問中の菅規行副知事、大西誠副議長らと合流する形で総勢13名での訪問となった。

今回の最大の目的は、南加愛媛県人会創立115周年記念祝賀会等を通じた県人会メンバーとの交流促進であった。

県人会は、本県からの移民一世によって1910年に創立され、同地域における日系人社会と愛媛県人コミュニティの礎を築くとともに、今日の発展に寄与してこられた。

本県では、昭和32年以来17回にわたって、時々の知事をはじめとした訪問団が派遣され、県人会メンバーもまたツアーを組み、故郷への訪問を相互に重ねながら、時と世代を超え、愛媛県人としての絆と親睦を深めてきた。

コロナ禍で110周年記念行事が流れ5年遅れての今回の実施となったが、八幡浜市出身の大谷喜平会長をはじめ県人会の皆様の温かなご配慮により、おかげ様で県下各地ご出身の所縁ある方々と近況を語り合い、友誼を育むことができた。

また、在ロサンゼルス日本国総領事館では室田総領事からカリフォルニア州の経済概況のレクチャー及び本県との貿易拡大に関し有意義な意見交換が行われたほか、県人による地元大手食品メーカーや日系スーパーマーケット、日本の伝統文化から最新のデザイン、食、観光等の情報発信拠点であるジャパン・ハウス等の視察を行った。

短期間で非常にタイトなスケジュールであったが、団員各位の温かいご理解ご協力を賜り、有意義で充実した海外派遣となった。お世話を頂いたすべての皆様に心から感謝を申し上げたい。なお、視察先それぞれの詳細については各議員よりご報告申し上げたく、各位におかれては本報告書をぜひご高覧賜りたいと思う。

愛媛県議会海外派遣（南加）議員団長 木村 誉

2. 派遣目的

現地で開催される「南加愛媛県人会創立 115 周年記念式典」に参加するほか、関係行政機関への表敬訪問、現地在住の県人との交流等を実施し、両国との友好関係を促進する。

3. 派遣期間

令和 7 年 11 月 8 日（土）～令和 7 年 11 月 13 日（木）までの 6 日間

【日 程】

	月日	地名	時刻	スケジュール
1	11/8 (土)	松山空港	16 : 45	松山空港 発
		羽田空港	18 : 15	羽田空港 着
		羽田空港	21 : 30	羽田空港 発
			(日付変更線通過)	(機内泊)
		ロサンゼルス	14 : 30 17 : 30	ロサンゼルス国際空港 着 南加愛媛県人会歓迎レセプション (ロサンゼルス泊)
2	11/9 (日)	モンテベロ	11 : 30	南加愛媛県人会創立 115 周年記念祝賀会
		ロサンゼルス	16 : 00	ドジャースタジアム 視察
			17 : 20	トーキョーセントラル 視察 (ロサンゼルス泊)
3	11/10 (月)	ロサンゼルス	8 : 45	J S L フーズ 視察
			11 : 00	在ロサンゼルス日本国総領事館 訪問
			14 : 00	ジャパン・ハウス 視察
			15 : 20	ハリウッド 視察
				(ロサンゼルス泊)
4	11/11 (火)	ロサンゼルス	14 : 20	ロサンゼルス国際空港 発
				(機内泊)
5	11/12 (水)	羽田空港	19 : 10	羽田空港 着
				(東京都泊)
6	11/13 (木)	羽田空港	7 : 15	羽田空港 発
		松山空港	8 : 50	松山空港 着

4. 議員団の構成

次のとおり、木村誉議員を団長に全5名の議員団を編成した。

【議員団名簿】

	氏名	期数	会派	備考
1	木村 誉	5	公明党	団 長
2	菊池 伸英	4	無所属	
3	松尾 和久	4	自由民主党	
4	松下 行吉	3	自由民主党	
5	加藤 瑞穂	1	国民民主党	

5. 派遣結果報告

(1) 南加愛媛県人会 歓迎レセプション

[11/8 (土)]

【文責：松尾 和久】

1. 概要

羽田空港を経由し、ロサンゼルス国際空港に到着後、ホテルへ移動し、南加愛媛県人会の皆様による歓迎レセプションを開催していただいた。

この場には、近畿愛媛県人会の今井会長もご出席されており、遠く離れた地においても「愛媛県にゆかりがある」というご縁の温かさを実感する機会となった。

2. 歓迎レセプションの様子

歓迎会では、南加愛媛県人会の大谷喜平会長をはじめ、会員の皆様が心温かく迎えてくださり、終始和やかな雰囲気の中、懇親を深めることができた。

会員の皆様からは、ロサンゼルスに住むに至るまでの苦労や、人生における前向きな挑戦の姿勢など、貴重なお話を伺うことができた。



3. 印象深かったお話の紹介

■ バズビー由美子氏（松山市出身）

松山市の大学を卒業後、海外へ留学。

ニューヨークなどで活動されたのち、愛媛県でALTとして教壇に立たれた経験もお持ちで、現在のご主人（愛媛県でALTとして教壇に立った経験もある）とご結婚され、ロサンゼルスで看護師として活躍中。

「若いころに、自分で何かを掴み取らなければいけない」

という強い志を胸に、様々な挑戦を重ねてこられた。
—今の愛媛の若者にも、ぜひ前向きにチャレンジしてほしい—
そんな熱いメッセージをいただいた。

■ 別の会員の方からの声

- ・先月、八幡浜市のご親戚を訪ねて帰省された際のこと。宇和島名物の「じゃこてんうどん」が店頭から姿を消していたことに寂しさを覚えた。
- ・JR 松山駅周辺の変化（何もなくなっていたこと）に驚き、「少し心配になった」などの声も寄せられた。

4. おわりに

遠くロサンゼルスに暮らしながらも、ふるさと愛媛を忘れず、常に温かな想いを寄せてくださる皆様のお気持ちに触れ、あらためて「ふるさとを守り続けることの責任」と向き合う機会となった。

こうしたつながりを、次の世代へとつなげていくためにも、今後も愛媛の魅力を守りながら、新たな魅力発信にも取り組んでまいりたい。

また、こうした県人会のつながりをもとに、愛媛へ訪れていただける外国人が増えるよう、愛媛の情報発信を行う対策も可能性があるのではないかと感じた。

（２）南加愛媛県人会創立 115 周年記念祝賀会

[11/9（日）]

【文責：松下 行吉】

11 月 9 日米国カリフォルニア州モンテベロ市のクワイエット・キャノン・イベントセンターで開催された、南加愛媛県人会創立 115 周年記念祝賀会に愛媛県議員団の一員として出席した。明治の早い時期から移民として海を渡る日本人は数多く、彼らは、定住した先で出身地域の者同士が集まり、生活支援や互助を目的に県人会を創っている。海外の愛媛県人会は、ロサンゼルス、ハワイ、ブラジル、アルゼンチン、ペルー、パラグアイ、シンガポールにあるが、明治 43（1910）年に創立された南カリフォルニアの南加愛媛県人会は、北米でも有数の長い歴史と強い絆を持つ県人会である。

ロサンゼルス日本人会によると、大正の中頃には 190 人程の愛媛県人が米国へ渡航・移住しており、ワシントン州・オレゴン州・カリフォルニア州の 3 州に集住し、都市部ではホテルや洋食店、洗濯所で働き、周辺部では農園や製材所、鉄道夫等として働いた方が多かったとのこと。苦しい労働に従事し苦闘しながら、移民一世の

方々は米国社会に腰を据えた。南加愛媛県人会の方々は、百年を越える歴史の中で太平洋戦争という苦難の時代をはさみながらも、米国社会に確固とした日系愛媛県人のコミュニティを築き、愛媛県、日本、米国の橋渡しをしてきた。特に愛媛大学との縁は深く、昭和 30 (1955) 年に竣工した愛媛大学記念講堂（現愛媛大学南加記念ホール）建設の際には、南加愛媛県人会からの多額の寄附を受けている。現在の南加愛媛県人会は、会員数約 150 名。大谷喜平会長を中心に活発に活動している。大谷会長は現在 72 歳、八幡浜市穴井出身で 4 歳の時に家族とともに米国に渡り、今年、37 の県人会が加盟する南加県人会協議会の会長にも就かれている。



感謝状を持って写真に納まる大西副議長（右）と大谷会長

創立 115 周年祝賀会の会場には、日本から愛媛県の菅規行副知事ほか職員 5 名と大西副議長をはじめとした私たち県議会議員、近畿愛媛県人会から今井会長ほか 4 名が、また、米国内からは南加愛媛県人会会員、各県人会会長、日系コミュニティ団体代表など合わせて約 170 人が出席し節目を祝った。

大谷会長は、挨拶で出席者に謝意を述べるとともに「国籍や背景の異なる仲間とも、愛媛の文化や精神を分かち合っていて欲しい」と若い世代にエールを送っていた。

また、菅副知事は、出席できなかった中村知事の祝辞を代読し、「南加愛媛県人会は長い歴史の中で困難を乗り越え、次世代に文化を継承しながら愛媛を発信してくださっていることを心強く思います」と述べた。大西副議長も福羅議長の祝辞を代読したが、冒頭に英語で自己紹介をして会場を和ませていた。来賓挨拶の後は、愛媛の風景写真のスライド上映が行われ、続いて宇和島屋アジアマーケット森口富雄会長の講話があった。また、事前に募集されたエッセイコンテスト“EHIME AND ME（愛媛とわたし）”では、青野治生氏、田中世貢氏、ピーターズ里愛氏、バズビー愛羽氏が入賞し、それぞれが日本語または英語で作品を発表した。長寿者と功労者の表彰も行われ、特別功労者には菊池ファミリー、松秀二郎氏、マイケル・E・ボーン氏が選ばれた。式典の最後には、大谷会長から菅副知事と大西副議長へ感謝状が渡され、記念品の交換を行って、全員で『ふるさと』を合唱し、盛会のうちに閉幕した。



功労者表彰を受けた皆さん。左端に立っているのは大谷会長、右が菅副知事

(3) ドジャースタジアム

[11/9 (日)]

【文責：菊池 伸英】

日本においてもロサンゼルス・ドジャースは高い知名度を誇り、大谷翔平、山本由伸、佐々木朗希といった日本人選手の活躍が連日のように報道され、世代を超えて親しまれる存在である。2025年10月25日から11月2日にかけて行われたワールドシリーズでは、ドジャースが球団史上初の世界一連覇を成し遂げ、全米が熱狂に包まれた。まさに世界的なスポーツ拠点として、



国際的発信力や経済効果を体現する象徴的施設といえる。その華やかな舞台をイメージし現地を訪れたが、今回はオフシーズンであったため、事前にツアー予約を行った者のみが内部見学可能であり、我々はスタジアム内部には入ることができなかった。そこで、外観、周辺環境、ショップ、アクセス状況など、公共施設として参考となる要素を中心に確認する視察となった。

ドジャースタジアムは1962年に開場し、現在のメジャーリーグ球場の中で3番目に古い歴史を持つ。それにもかかわらず、老朽化した印象はなく、適切な改修を重ねて維持管理されていることがうかがえた。収容人数は56,000人で、現役MLB球場としては最大規模を誇る。最も特徴的なのは、フィールド全体が完全な左右対称となる設計である。近年、個性を重視した非対称設計が主流化する中、開場当初の美しいシンメトリーを維持し続けており、球場としての普遍的な美しさを確保している。この点は利用者の満足度向上だけでなく、施設自体のブランド価値形成にも寄与していると感じた。外観も周囲の丘陵地形と調和するよう設計されており、巨大施設ながら景観を損なわない配慮がなされている点は、都市計画の観点から大変参考になった。

視察当日は試合もイベントもない日であったが、スタジアム敷地内のショップには観光客が訪れていた。ユニフォーム、キャップ、応援グッズ、記念品など幅広い商品が並び、スタジアム観戦を伴わない日にも継続的な経済活動が生まれていることが確認できた。スポーツ施設を観戦機能だけにとどめず、観光資源として運用する重要性を実感した。

一方で、アクセス面には課題も見られた。ドジャースタジアムには約16,000台の駐車場が整備されており、現地の案内人によると実際には2万台以上収容できるとも言われている。しかし、自家用車社会であるロサンゼルスにおいて、多くのファンが自家用車やUber等のライドシェアで来場するため、夕方の試合開催日は慢

性的な交通渋滞が発生するとのことであった。

最寄りのユニオン駅から無料シャトルバスが運行されているものの、公共交通の利用率が十分ではない状況が推察された。大規模施設を整備する際、交通インフラ、駐車場確保、住民生活への影響、公共交通の利便性向上策を包括的に検討する必要がある点は、自治体政策にとって重要な教訓である。

今回、スタジアム内部に入ることは叶わなかったが、外観視察だけでも多くの学びを得た。

スポーツ施設は単に試合を行う場所ではなく、都市ブランド、経済、交通政策、景観形成、観光振興など多面的な機能を担う公共資産であるという認識を新たにした。今後、県内でスタジアム整備や大規模集客施設の計画を検討する際には、今回の視察で得られた知見を活かし、持続可能で地域に愛される施設づくりが求められる。



（４）ロサンゼルス「Tokyo Central」

〔11/9（日）〕

【文責：松尾 和久】

1. 視察の目的

今回のロサンゼルス訪問の一環として、現地における日本文化・日本食流通の拠点として注目されているスーパーマーケット「Tokyo Central」を視察した。

アメリカにおける日本の食文化・生活様式の浸透状況を肌で感じる機会となった。



2. 視察の概要

Tokyo Central は、日系企業によって運営されている大型のスーパーマーケットで、日本の食材・惣菜・日用品・書籍・キャラクターグッズなど、幅広い商品が揃っており、在米日本人のみならずアジア系住民や現地のアメリカ人にも人気があるとのことであった。

店舗内には日本語の表記も多く、日本のスーパーの雰囲気が感じられるお店となっていた。寿司・弁当・ラーメンなどの即食商品も充実しており、食文化の入り口としても非常に効果的だと感じた。



3. 所感と今後への示唆

本施設は、単なる商業施設というだけでなく、日本文化の発信地であり、現地コミュニティとの接点づくりの場にもなっている。

愛媛県をはじめとする地方自治体や事業者にとっても、今後このような店舗を「海外における地域産品や観光の情報発信拠点」として活用することが期待される。

愛媛県においても令和3年から「Tokyo Central」12店舗で「愛媛・四国フェア」を実施し、県内企業12社の商品を棚に並べての販売を行っているとのことであった。県産品のもち菓子や米菓、珍味などが人気があるとのこと。こうしたこれまで積み上げているつながりもさらに、深化させていくことを期待したい。

また、こうした取り組みによって、海外に住む日系人や日本ファンの方々との文化・経済的なつながりを強め、愛媛県の知名度向上につなげていきたい。



4. まとめ

Tokyo Central の存在が、「海外における日本文化の根つき」と「地域との新たな連携可能性」を示していることを実感した。

今後、愛媛県としても、こうした民間の販路・文化交流拠点と連携しながら、ふるさとを世界へ広げる新たな可能性を探っていくべきだと考える。

(5) J S Lフーズ

[11/10 (月)]

【文責：菊池 伸英】

ロサンゼルスに本社を置く食品製造会社 J S Lフーズを視察する機会を得た。同社は、オトイチ氏とクメ氏の5番目の子として生まれたカワナ氏が創業したもので、戦後間もない時期にロサンゼルスへ渡り、アジア系移民の需要を背景に麺類、ワンタン皮、クッキーなどの製造を手掛けたことに始まる。家族経営を基盤としながら事業を拡大し、現在では米国アジア食品市場を代表する企業の一つとして地域経済へ大きく貢献している。視察では、創業から現在に至る事業展開の経緯、製造現場の仕組み、雇用や食文化形成に果たす役割について説明を受け、工場内を見学させていただいた。



1952 年、JSL はコマース工場でツインドラゴンクッキーの生産を開始し、以後 70 年以上にわたりアジア系食料品店の定番商品として定着した。これは、移民が多いロサンゼルスにおいて、郷土食への需要が安定的な市場を形成することを示す好例である。1970 年には初の麺製造ラインが導入され、累計 3,000 万ポンド以上を生産するなど本格的な事業拡大へ踏み出した。1975 年には「笑う仏陀」ブランドで日本風焼きそばを発売し、アジア食品文化を全米へ広げる先駆的役割を果たしたとされる。さらに 1989 年にはリンカーンハイツ工場を稼働させ、生産設備の増強と品目拡大を進め、アジア風麺類やパスタ、穀物類など多様な商品供給体制を確立した。1990 年代にはレシ

ピ開発が組織的に行われ、1991 年から 1993 年にかけて研究開発チームが多数の基幹製品の製法を確立した。これらは当時のノートに記録され、現在も社の財産として保管されていると説明があった。また 1995 年には非遺伝子組み換え製法を採用した餃子、エッグロール、ワンタンを発売し、食の安全性と品質に配慮した先進的取り組みを行っている。米国における食品安全意識の高まりを捉え、企業競争力につなげた点は大いに学ぶべきものがある。

2006 年には創業者の長男であるカワナティジ氏が三代目社長に就任し、家族経

営を継続しながらも企業として持続的発展を図っている。2014 年にはインディアナ通りに第三工場、2020 年にはテキサス州ヒューストンに州外初の第四工場を開設し、生産分散や物流最適化にも取り組んでいる。さらに 2015 年には革新的なフュージョン料理を提案するシェフ・ヤキ氏が加わり、消費者ニーズの多様化に対応するブランド戦略を強化している点も印象的であった。

さらに現在は、工場内で新商品の生産ラインの増設を検討しており、円安の影響を踏まえ、日本製の麺類を輸入し、アメリカで販売する物販事業の可能性についても検討中であると伺った。常に攻めの姿勢で新しいことに挑戦する企業文化に大きな衝撃を受けた。

今回の視察を通じ、JSL フーズは単なる食品製造企業ではなく、移民の歴史、食文化の継承、地域産業の発展、雇用創出、海外市場開拓を担う存在であることを再認識した。家族経営を基礎としながらも時代の変化に柔軟に対応し、設備投資、商品開発、品質管理、人材育成を着実に進めてきたことが企業の長寿と信頼につながっていると感じられた。今後、地域産品の海外展開や、多文化共生型産業政策を検討する上で、JSL フーズの歩みと戦略は大きな示唆を与えるものであり、今回の視察で得た知見を我が県の施策にも活かしていきたい。

（６）在ロサンゼルス日本国総領事館

[11/10（月）]

【文責：加藤 瑞穂】

令和 7 年 11 月 10 日、在ロサンゼルス日本国総領事館（以下、総領事館）を訪問し、現地経済情勢、消費動向、雇用環境、社会課題、日本企業の活動状況について現地職員および関係者との意見交換を行った。ロサンゼルスはアメリカ国内有数の経済圏であり、エンターテインメント産業に加え、物流、IT、医療、観光、教育など多様な産業が集積している。主に本会合では、ロサンゼルス市の経済状況、アメリカ社会で拡大する貧富の格差、さらに日本企業のマーケティング手法が世界市場において停滞しつつある現状など、多岐にわたる内容について説明を受けた。愛媛県内企業の海外展開、マーケティング手法の刷新、地域経済活性化を考える上で多くの示唆を得る機会となった。



○ロサンゼルス経済状況

総領事館の説明によると、ロサンゼルス郡の経済状況は一国に匹敵するほど大きく、アメリカ西海岸最大級の経済圏として成長を続け、国際貿易など多様な分野が集積し盛んである。旺盛な消費と人口の多様性が経済を支えている。ロサンゼルスはロサンゼルス港とロングビーチ港という2大港湾を抱えている。両港合わせると全米の輸入コンテナの約4割、アジアとの海上貿易では最大規模を占めると言われ、事実上「アメリカ西海岸の玄関口」である。日本、韓国、中国、台湾、東南アジアとの物流・商取引を支えており、日本企業も、自動車・物流・食品・製造・商社など多く進出し、雇用創出に寄与している。港は「経済インフラ」であり、大きな財政源にもなっている。近年はデジタル産業、医療産業の成長が著しく、スタートアップ企業が活発であった。一方、インフレに伴う物価上昇、住宅価格高騰、人材不足など構造的な問題も抱えている。所得は伸びているものの生活コストの高騰が顕著であり、特に中心部での住宅価格は日本と比較にならない水準で、郊外への移住が増加している。市民の経済的不安は決して小さくないという印象を受けた。

○顕在化する貧富の格差

ロサンゼルス市における貧富の格差の深刻さが指摘された。高所得者層はIT、金融、エンターテインメントなどで高収入を得る一方、低所得者層は最低賃金に依存し、生活費上昇とのバランスが取れていない。また、住宅価格高騰が居宅のない方の増加の一因となっており、都市部では路上生活者が急増している。行政、NPO、民間企業が連携して対策に取り組むものの抜本的な解決には至っていない状況である。この格差拡大は単なる経済問題ではなく、治安、教育機会、地域のコミュニティ形成など他方面に影響を及ぼしており、社会的分断が進んでいる現状である。総合的な政策対応が求められている。米国の経済成長は必ずしもすべての層に恩恵をもたらしておらず、政策・行政支援が必要である。日本の地域政策を考える上でも、参考になった。

○日本企業のマンネリ化と自治体の課題

総領事館が特に懸念として挙げたのは、アメリカ市場における日本企業の存在感の低下である。品質の高さは引き続き評価されているが、アメリカでは、世界観・発信力・ブランド力・新規性が重視されており、これに適した企業ほど市場拡大に成功しているとのことだった。韓国企業やアメリカ企業に後れをとっているとのことで「優れた品質を持ちながら、十分に届いていない」という指摘があった。従来型販路依存（製品そのものに依存し、ストーリー・文化的魅力が弱い）、ターゲット設定（SNS・映像・体験型プロモーション活用が限定的で若者向けマーケティングが国内基準で止まり、国際市場とずれがある）の曖昧さなどが要因となり、現地消費者に魅力が伝わりにくいことが課題となっている。また、日本の広告やプロモ

ーションが長期にわたり同じ手法(新しい価値創造よりも従来商品の改良に留まる傾向が強い)に留まり、マンネリ化していると受け止められているとの意見もあった。米国では、SNS 発信、インフルエンサー、体験型イベント、ストーリーブランディングなど多様なマーケティングが主流となっており、日本側の進化が求められている。日本から高校生が訪れることもある。若者とのコミュニケーションも図り、意見などを聴取していくことが必要不可欠である。

○視察を踏まえた地方への示唆

今回の総領事館での会合から、愛媛県や地方自治体が取り組むべき視点として、

① 国際市場を意識した政策形成が必要であること

農産物、加工食品、観光、ものづくりなど、県産品には世界で通用する可能性がある。地域資源を国内目線だけではなく国際市場の視点で捉え直すことが重要である。教育、人材なども「ストーリー」「世界観」を強く打ち出すマーケティングが求められる。

② 若者・海外向けの情報発信力の強化

商品の魅力そのものだけではなく、背景にある地域文化、作り手、環境配慮など「物語」を発信する必要がある。動画、SNS、現地イベントなど、世界基準の広報手段を取り入れ、ターゲットごとの戦略設計を行う必要がある。

③ 経済格差を他人事としない多様性を受け入れる地域社会づくり

格差や移民問題が示すように、社会的包摂は経済力と同様に重要である。アメリカの格差拡大は日本でも他人事ではなく、地方でも生活困難者やひとり親家庭の支援、住宅政策、教育機会創出が重要となる。

④ 多様な産業の支援と新規事業育成

ロサンゼルスのように産業が多様化している地域は強い。愛媛県でも既存産業に加え、IT・クリエイティブ・コンテンツ産業などの育成が課題である。ロサンゼルスの起業精神から、失敗を許容し、学びに変える社会風土の重要性を実感した。

総領事館との会合は、海外事情を学ぶだけでなく、日本・愛媛の課題を照らし返す貴重な機会となった。ロサンゼルスは富と文化の集積地であると同時に経済成長と格差拡大、社会不安を抱える現実的な都市でもあった。そして世界市場で戦う企業の姿勢を知ること、地方が今後取るべき方向性がより明確になったと感じている。愛媛県が今後成長を続けるためには、海外の成功事例だけでなく課題も踏まえ、地域づくりや経済政策に反映していくことが重要である。今回得た知見を県政に生かし、地域産業の活性化と持続的発展、若者支援、県民生活の向上に努めていきたい。

(7) ジャパン・ハウス

[11/10 (月)]

【文責：松下 行吉】

ジャパン・ハウスは、戦略的対外発信の強化に向けた取組みの一環として、外務省が世界3都市（ロサンゼルス、ロンドン、サンパウロ）に設置した対外発信拠点である。これまで日本に興味がなかった人々も含め、幅広い層に向けて日本の多様な魅力、政策や取組みを伝え、親日派・知日派の裾野を拡大していくことを目的としている。レストラン、カフェ、ショップ等の商業スペースを設置し、民間の活力、地方の魅力などを積極的に活用してオールジャパンで日本の情報を発信している。

視察したジャパン・ハウス・ロサンゼルスは、映画の都ハリウッドの中心地にある複合施設（オベーション・ハリウッド）の2階と5階の2つのフロアで事業を展開していた。2階は展示ギャラリーやWAZA ショップスペース、5階には多目的ホール（サロン）やレストラン、図書館がある。ここでさまざまなプログラムやイベントを催すとのことであった。

視察時、2階フロアでは、入口付近のWAZA ショップで、漆器や木工品、織物など伝統工芸品の展示販売を行っており、少し奥に入った展示ギャラリーでは「美味しそう！日本の食のレプリカ文化を探る」と題して、大阪市に拠点を置く「株式会社いわさき」のフードレプリカ（食材模型）を紹介していた。

フードレプリカは、20世紀初頭の日本で考案されたもので、手作りモデルとして日本国内で独自の進化を遂げている。本物と見間違えるようなサンプル作りは、日本が誇る新たな文化となっている。当初は蝋で作られていたが、現在では耐久性のある樹脂に変わっている。日本の食文化の愛される一部となり、キッチンやスマホケースなどの珍しいアイテムとしても登場しているということであった。

会場は7つのテーマエリアで構成され、料理レプリカの歴史や職人技を学び、自分だけの弁当を作って写真を共有できるようになっていた。

ジャパン・ハウスの特長として民間の活力、地方の魅力などを積極的に発信する点があるが、ジャパン・ハウス・ロサンゼルスでは5階にある多目的ホール（サロン）で、映画上映や、講演、パネルディスカッション、家族向けのプログラムなど、多彩なオリジナルイベントを開催している。企業や地域団体のプライベートイベン



食材模型について、スタッフから説明を受ける。手前にある料理はすべて模型。

トにも利用されているとのことで、レストラン（ミシュランの星を獲得した会席料理レストラン「UKA」）では、特別な食事体験も提供している。



海部館長（写真中央）からレストランの設備と使用状況について説明を受けた。

視察当時5階フロアは利用されておらず、多目的ホールやレストランの内に入って、海部優子館長から説明を聞くことができた。日本の地方公共団体の利用も多いようで、徳島県や高知県など日本の自治体がジャパン・ハウスを活用したとのことであった。私たちの視察の二日後には、大分県が米国内のバイヤーを招いて、自県の食をテーマに宣伝イベントを行うと話されていた。

余談になるが、海部館長は、外務省でキャリアをスタートし、2001年に在ロサンゼルス日本国総領事館に配属され、政治問題と地域社会関係を担当する領事を務めたあと、2007年に政府を離れ、米国内でさまざまな仕事をされている。2016年1月にジャパン・ハウス・ロサンゼルスに参加し、組織を立ち上げられた。現在、多くの日本の文化・ビジネス団体の理事を務め、日本と米国の橋渡し役を務められている。

今回つながりを得たことを機に、愛媛県もジャパン・ハウス・ロサンゼルスを使って米国でのPR活動に取り組んではどうかと思った。

（８）ハリウッド

〔11/10（月）〕

【文責：加藤 瑞穂】

令和7年11月10日、米国カリフォルニア州ロサンゼルス市ハリウッド地区において、現地の都市景観、観客動向、交通事情、防犯対策、商業空間の活用状況などを外観視察した。映画産業の象徴として世界的知名度をもつハリウッドが、地域ブランドをどのように都市空間に反映し、経済効果や交流人口増加につなげていけるかを把握すること、人口減少や地域経済の多角化が課題となる本県にとって、多様な学びが得られる視察となった。

○地域の印象と街並み

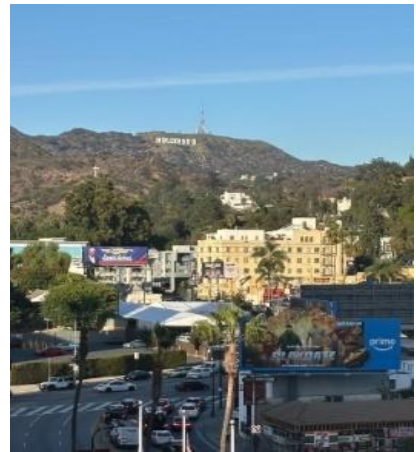
ハリウッド大通り周辺は、映画関連施設、土産物店、レストラン、エンターテインメント施設が密集し、歩行者の滞在を前提とした市街地形成が進んでいる。街路

樹、広めの歩道、ベンチ、案内表示が整備され、歩きやすさが確保されていた。建物は新旧が混在し、歴史的な劇場や看板を残しつつ、現代的な商業施設とも共存している点が特徴的である。地域全体で「映画の都」を感じさせるデザイン統一が図られていた。特に、建物外観の色彩、看板のフォント、窓面装飾などに映画文化を象徴とする演出が見られ、観光客にわかりやすい地域アイデンティティを形成していると感じた。

○観光客の動向と雰囲気

視察当日は平日であったにもかかわらず、国内外からの観光客が非常に多く、徒歩で移動する人の流れが途切れなかった。団体客よりも個人旅行者・若年層が目立ち、写真撮影や動画配信とみられる行動が多かった。観光客が街を回遊し、飲食・買い物をしながら長期滞在している様子が確認でき、エリア全体で経済循環が生まれている印象を受けた。

また、同一通りで大型商業施設から路面店まで多様な業態が立地しており、観光消費の裾野の広さが感じられた。



○交通・アクセス環境

ハリウッド地区には地下鉄駅、路線バス停、公共駐車場が点在し、徒歩移動を中心に公共交通が補完する形で交通体系が成立していた。道路は交通量が多く、車道と歩道が明確に区分されており、交差点には歩行者信号・横断設備が整備され、安全性への配慮が見られた。一方で、観光客増加に伴う渋滞、違法駐車、車両混雑も確認され、人気観光地が抱える課題もある。

○治安・環境整備

通りには警察、自転車巡回、セキュリティスタッフが複数配置され、観光客が安心して滞在できる環境づくりが行われていた。監視カメラや街灯の整備も進んでいた。人が多い一方で、路上生活者も見受けられ、都市部特有の社会課題も表出していた。商店街や行政が連携し、安心して歩ける環境づくりを継続していることがうかがえた。

○今回の視察から得た示唆

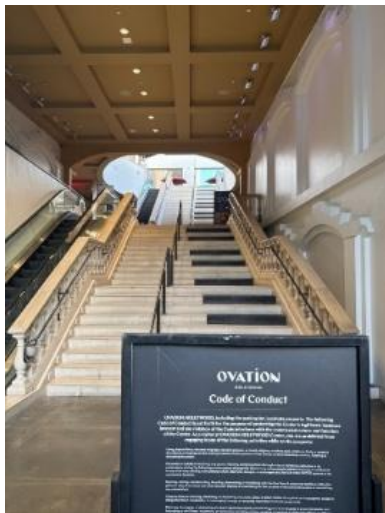
外観のみの視察であっても感じ捉えることができる学びが多かった。

- ① 街並みそのものが観光資源となる都市設計がブランド力を生むこと。
- ② 歩行空間・案内表示・商業施設配置の一体整備が回遊性を高めること。

- ③ 地域の歴史・文化を景観デザインに落とし込みストーリーをブランド化し、観光や産業と結びつける重要性
- ④ 観光振興と治安対策は不可分であり、行政・民間連携が必須であること。
- ⑤ 観光客を受け入れる都市マネジメントは地方都市にも応用可能であること、体験型・参加型の地域ツーリズム強化。

愛媛県にも、自然、歴史、文化など魅力ある資源が多い。商店街や駅周辺整備、地域の物語を活かした景観形成に取り組むことで、交流人口拡大やまちの活性化につながる可能性があると感じた。産業振興と観光政策を一体化し、長期的に収益を生む地域経済モデルを構築することが重要である。

今回の外観視察を通じ、ハリウッドは映画産業の象徴というだけでなく、日常の街並みそのものが地域経済を支える資本となっていることを実感した。決して特別な都市ではなく、地域の魅力を磨き、発信し続けることにより、世界的なブランドを築いた地域である。本県のまちづくり、観光政策、景観形成において参考となる多くの示唆を得た。視察で得たことを活かし、愛媛県が選ばれ、住み続けたい地域となるよう取り組んでいきたい。



6. おわりに

今回の海外派遣は、県議会と理事者が一体となり、南加愛媛県人会創立 115 周年記念祝賀会への参加のほか、在ロサンゼルス日本国総領事館表敬訪問、日系スーパー・メーカー視察及び現地在住県人との交流等を実施し、県人としての親睦と日米両国の友好関係を促進するという大変意義あるものとなった。

とりわけ県人会の大谷喜平会長には、初日から最終日まで私たちの行程すべてにご同行頂き、終始細やかなご配慮と温かなお気遣いを賜り、団員一同感謝の思いで一杯である。

地元ロサンゼルス・ドジャースが神がかり的な強さで MLB ワールドシリーズを連覇した直後とあって、未だ興奮冷めやらぬ雰囲気の中開催された歓迎レセプションで、県人会の大谷会長が、日本が誇る“オータニサン”こと大谷翔平選手と名前が一字違いであることをユーモアたっぷりにアピールしながら、大谷選手の活躍によって今、LA という街全体がかつてないほど日本と日本文化に対するリスペクトに包まれているとの現況を、誇らしく、熱く語られたシーンは、私にとってひととき印象深い思い出となった。

今回の訪問を通じて得られた知見と友情は大変貴重で得難いものであり、県人会との交流をこの先世代を超えて育み続けながら、私たち団員一人一人においては、県産品を中心とした経済交流や食と文化の情報発信、インバウンドの拡大、青年をはじめとした人材交流など、県政発展に資する政策の立案に繋げ、成果を挙げられるようしっかりと取り組んでまいりたい。

なお、日本に向けた帰国便が機材不良のため、大幅に遅延し、松山への帰着が 1 日ずれこむこととなった。不可抗力とはいえ、大事に至らず安堵するとともに、緊急かつ臨機応変に対応いただいた職員及び事業者様に心から感謝申し上げたい。

結びに、今回の海外派遣にご尽力頂いた関係各位に心から感謝申し上げるとともに、南加県人会並びに現地日系コミュニティの益々のご発展と、県人はじめすべての所縁ある皆様のご健勝ご多幸を祈念し、御礼の挨拶に代えたいと思う。

愛媛県議会海外派遣（南加）議員団長 木村 誉